

## ステンドグラスの本質 パブリックアートとしての側面からの展望

光ステンド工房代表  
展覧会委員会委員長  
日本建築美術工芸協会会員

平山健雄

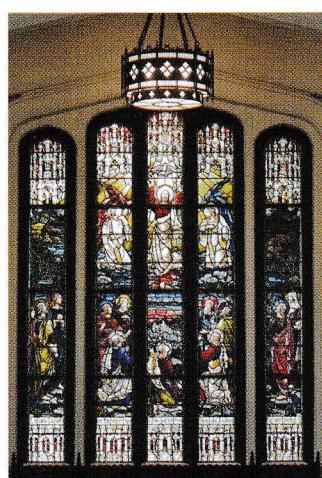


ステンドグラスにおいて、教会建築特有の聖人や預言者、天使などは、ガラスに絵付けをする伝統的な技術が必要で、日本にはほとんど紹介されてこなかった。そのためこの芸術の草創期である大正中期頃よりアールヌーヴォーやアールデコ様式の絵付け不要な幾何学的模様のデザインがステンドグラスに置き換えられ唐様模様や和風の意匠に取り込まれ、独自のスタイルが生まれていった。一方ゴシック前期に頂点を迎えたこの芸術は、フランス13世紀シャルトル大聖堂にその典型を見ることが出来る。南北のバラ窓から差し込む赤系・青系の光は中央の祭壇に集束され、神的な光の演出がなされている。この光の空間構成は、ルネサンスや時代を経た現代にまで建築様式の変遷と共に様々なスタイルに変貌しつつ、現在に至っている。

120年程の歴史しかない、工芸品的要素の強い日本のステンドグラスは、建築の大きな内部空間に対応出来ずに現代にまでそのまま歩みを進めたことが現代建築に美しく調和することがかなわない理由の一つになっている。

現在ガラスや鉛の腐食が進み深刻な状況になっており、80年前後の周期で窓から降ろしての修復が行われている。最近では教会の窓の外部にもう一枚保護ガラスを施工し、空間の空気層を循環式にして湿度を上げないような工夫がされている。取り付けられているステンドグラスが、未来永劫光り輝く神からの光を教会の内部に伝えてゆくような理念に比べ、日本の場合は次の世代に引き渡してゆく考えを持ち合わせていないことにより非常に脆弱な施工方法になっている所が多く見受けられ、高温多湿な日本の気候、木造の建築物、文化財的価値を持った作例が少なくなく修復が急がれる。

当光ステンド工房が修復に携わった仙台ラーハウゼー記念東北学院礼拝堂は、横浜で活躍したJ・H・モーガン設計による1932年竣工の建物で、地元産の石による堅牢な造りで東日本大震災にも



耐えている。ステンドグラスはイギリスロンドン、ヒートン・バトラー・アンド・バイン工房の作になる。施工方法はヨーロッパステンドグラスの伝統にのっとった補強がされているが、鉛桟の劣化により平面性が失われ、危機的状態であった。

横浜英和学院の例は、行方不明のステンドグラスが悲惨な状態で見つかり、修復をし

て新校舎に再利用されている。横浜市開港記念会館の三窓の場合は、稚拙な補強方法によりかえって歪みが増長され、又、煙草の煙による汚れは想像を絶するものがあった。

横浜に残る文化財的価値のある作品はほとんど瀕死の状態にあり、早急な対策が望まれる。

一方、現代フランスを主とする教会建築に施工されているステンドグラスは、例えばオーギュスト・ペレ設計のノートルダム・デュ・ランシー教会にはいち早く600×600のプレキャストコンクリートのパネルにモーリス・ドゥニ原画のステンドグラスが建築壁面すべてに使われ、光の壁となっている。竣工は1923年になる。現代ステンドグラスの曙とも云われているアンリ・マチス設計のロザリオ礼拝堂の作品は、南仏ニースに近いヴァンスの郊外山の中腹の地にあって、光溢れる空間を見事にマチスの結論として創造している。アクションペインティング作家と云われているピエール・スラージュ原画による作品が、山間の巡礼地コンクのサント・フォア教会にある。現代抽象のステンドグラスがここから始まり、様々な礼拝堂に次々と使われるようになった。パリのアリアンス教会には、ポップアーティストのマルシャル・レイスによる大胆なパソコン原画から、シルヴァカンヌ礼拝堂には、サルキス・ザブニヤンによる一枚ガラス板へのミニマリストイックな絵付け作品、パリ郊外大学都市クレテイユには現代建築にウド・ゼンボックの光空間を見事に演出した建築とステンドグラスが一体となったノートルダム大聖堂。昨年末にはロンドンウェストミンスター修道院教会にデービッド・ホックニー原画による作品が使われている。ヨーロッパではパブリックな性格を持つ教会堂は修復の連続性を受け継いでおり、ステンドグラスも同様修復が繰り返されている。

日本は教会や公会堂、病院など、公共性のある建物の保存には消極的な面があり、これから100年後に残っている建築物とそれに付随するアートワークはどのような末路をたどるのか想像すると、背筋が寒くなる思いに駆られる。

後世に残すべきステンドグラスを含む文化財への正当な価値判断が出来得る人材と、技術者の育成と、各自治体などの意識改革が必要に思われる。

